

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 諸岡 知徳

論 文 題 目

通俗小説という劇場
——戦間期新聞通俗小説と挿絵の研究——

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	坪井秀人
委員	名古屋大学	教授	塩村 耕
委員	名古屋大学	准教授	日比嘉高
委員	甲南大学	教授	木股知史

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は、戦間期に発表された新聞通俗小説を対象とし、通俗小説というジャンルが内包した同時代の世相との関わりやその表象の方法、新聞連載時に掲載された挿絵と小説テキストとの共同作業の実態を明らかにしようとするものである。論文全体は全10章より成り、序章のほか大きく二部に分けられ、第Ⅰ部が通俗小説論、第Ⅱ部が挿絵と小説との比較文学史論に当てられている。このうち3篇は学術雑誌掲載の審査付き論文である。

第Ⅰ部では通俗小説の同時代性と、そのテキストにおける女性の表象に焦点が当てられる。第1章では通俗小説というジャンルを実質的に牽引した菊池寛の作品が描く種々の女性作中人物を分類整理することを通して、新しい家庭道徳の提示など通俗小説が担った教化主義的性格を解明しようとしている。第2章では新感覚派からプロレタリア文学へと移り、さらに転向して通俗小説を書いた片岡鉄兵を中心に上げ、片岡の小説テキストにおけるモダン・ガールの表象に注目することで、通俗小説というジャンルでモダン・ガールがどのように描かれたかを、挿絵の分析を交えながら考察している。第3章は女性イメージの表現について、小島政二郎『感情山脈』ほか複数のテキストを対照させながら分析し、テキストや挿絵に描写されたファッションがそのイメージ形成にどのように関与したかを論じている。第4章では、横光利一『家族会議』を題材に男性作中人物の役割に着目し、そこでの婚姻関係が男同士の絆を肯定する経済システムの導入によって〈自然〉化されていると論ずる。第5章では通俗小説における植民地主義の問題が取り上げられ、1930年代後半から女性のライフ・コースをテーマとする通俗小説に〈外地〉の空間が用いられてくる様相について検証し、女性の〈外地〉志向を描くことで、このジャンルが植民地主義と家父長制とを統合するイデオロギー装置として機能したことを確認している。

第Ⅱ部では第Ⅰ部でも言及している通俗小説の挿絵に焦点をあて、戦間期の挿絵の表現方法について代表的な作家の作品を例に具体的に分析している。第6章では複製技術時代における挿絵の位置づけを行い、田中良・岩田専太郎の描く女性イメージをもとに、印刷・製版技術の進展や写真図版との関わりについて多角的に論じている。第7章では挿絵の第一人者である石井鶴三を取り上げ、木村荘八や太田三郎の挿絵と比較しながら、彼の描く都市風景を分析し、石井の挿絵芸術が持っていた可能性と限界について考察している。第8章は木村荘八の言説を検討することを通して、石井鶴三を中心に記述されてきた挿絵史の再考を試みている。1910年代における新聞連載小説を整理し、その挿絵の展開を追うことを通して、新聞社間の競争関係についても検証を行っている。第9章は1920年代から30年代にかけて活躍した小出楯重の挿絵を取り上げ、小出の挿絵観にも触れながら谷崎潤一郎『蓼喰ふ虫』の挿絵に至るまでの小出の多様な表現の試みについて分析を加えている。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

第一次大戦とアジア太平洋戦争の間に挟まれた戦間期、とりわけ 1920 年代から 30 年代にかけての時代は出版資本の拡大や消費文化の浸透を背景とする文化・芸術の大衆化が急速に展開していく時代だが、文学史においてこの時代のキーワードになるのが〈通俗〉というものであり、ジャンルとしては通俗小説にそのような時代性が集約的に顕れている。本論文も論及する小説『家族会議』に先だって発表された横光利一の「純粹小説論」の提起にも明らかなように、通俗小説をどのように評価するかは、戦間期の時代の文学的問題の核心であると言っても過言ではない。このジャンルの大立者である菊池寛など、個別作家を単位とした研究は今まであるが、戦間期という枠組みから通俗小説を総合的に捉えた研究は前田愛など少数の例外を除いて少なかった。本論文はそのような研究史の空白を埋めるとともに、新聞連載小説においてテキストと同等の役割を果たした挿絵の表現方法を分析し、主題論的には中心的なモチーフである女性イメージを小説と図像の両面から丹念に読み解いた労作である。

本論文の方法論的野心は小説と挿絵のテキストを、その初出に当たって精緻に読み解き、複数のテキストに共通する構図や構造を明らかにすることと、モダン・ガールなど同時代の世相・風俗の反映や新聞社の紙面戦略、写真など新興メディアとの相関から浮上する印刷・製版技術の進展と制約の問題等々、時代的なコンテキストを考察することとを両立させようとしているところにあり、それは豊富な資料と図像の分析を伴うことによって多くの成果をもたらしている。通俗小説は明治 20 年代以降に文芸ジャンルとして大衆化した家庭小説との系譜的な連関を持っており（本論文でその系譜に対する考察があまり含まれていないのは残念だが）、それを特に菊池寛の創作の考察から、連続性としての側面ではなく夫婦を単位とする新しい家庭道徳のイデオロギーの顕現として位置づけたのは、的確であり適切である。論文の後半第Ⅱ部は挿絵研究に集中しているが、挿絵の分析は第Ⅰ部のテキスト分析においても行われており、本論文は一貫して小説言語と連動する挿絵の機能を重視して、それを正当に評価する。

『家族会議』や谷崎『痴人の愛』『蓼喰ふ虫』などの著名作品だけでなく小島政二郎『感情山脈』その他、取り上げる作品も多彩であり、文学史・挿絵史研究において取り上げられることの少なかった作品に光をあてた先駆性は評価に値する。

もっとも、論文の中心的な課題でもある〈通俗〉及び〈通俗小説〉とは何かという問いに対する考察がなお刷新されるに至っていない点、明治や近世などの先行する時代との比較や伝統の再解釈という視点が稀薄な点、挿絵史への書誌的な目配りが不十分である点など、幾つかの問題点も指摘できる。とはいえ、それらは今後の研究の進展によって十分に改善できるものであり、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいものと判断した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	諸岡 知徳
試験担当者	主査	名古屋大学	教授	坪井 秀人
	委員	名古屋大学	教授	塩村 耕
	委員	名古屋大学	准教授	日比 嘉高
	委員	甲南大学	教授	木股 知史
(試験の結果の要旨)				
<p>名古屋大学大学院文学研究科（課程博士）審査内規第5条および第6条にもとづき、平成25年10月10日午後4時より2時間にわたり、文学研究科大会議室において試験担当者一同、申請者に面接し、論文内容および専門分野における研究能力について口頭試問を行った結果、申請者は合格と認められた。</p>				